ASLE-Japan／文学・環境学会
NEWSLETTER
The Association for the Study of Literature and Environment in Japan
June 30, 2013, No. 34

【役員名簿（2012-2013）】（五十音順）
代　表：管　啓次郎（明治大学）
副代表：結城　正美（金沢大学）
顧　問：上遠　恵子
西村　頼男（阪南大学名誉教授）
事務局長：豊里　真弓（札幌大学）
事務局補佐：
高橋　綾子（長岡技術科学大学）
会　計：相原　優子（武蔵野美術大学）
林　直生（滋賀大学）
監　事：上岡　克己（高知大学）
ニューズレター編集委員：
辻　和彦（近畿大学）
平塚　博子（日本大学）
山本　洋平（戸板女子短期大学）
会誌編集委員：
小谷　一明（新潟県立大学）
木下　卓（愛媛大学名誉教授）
中川　僚子（聖心女子大学）
高橋　龍夫（専修大学）
コンピューターセンター：
岩政　伸治（白百合女子大学）
北国　伸隆（萩光塩学院）
山城　新（琉球大学）
評議員：Bruce Allen（清泉女子大学）
浅井　千晶（千里金蘭大学）
池田　志郎（熊本大学）
石幡　直樹（東北大学）
太田　雅孝（大東文化大学）
茅野　佳子（明星大学）
黒崎真由美（湘北短期大学）
塩田　弘（広島修道大学）
高橋　勤（九州大学）
高橋　昌子（三重大学）
巽　孝之（慶応義塾大学）
巴山　岳人（和歌山大学・非）
村上　清敏（金沢大学）
横田　由理（大東文化大学・非）
吉田　美津（松山大学）
院生代表：山田　悠介（立教大学・院）
広　報：大野　美砂（東京海洋大学）
喜納　育江（国際沖縄研究所）
河野　千絵（日本大学（非））
研究助成：岡島　成行（大妻女子大学）
高田　賢一（青山学院大学）
乳井　昌史（早稲田大学）
野田　研一（立教大学）
山里　勝己（名桜大学）
管　啓次郎（代表）
結城　正美（副代表）

牡蠣の海への旅から

代表　管　啓次郎（明治大学）

宮城県唐桑町はいまでは気仙沼市になっている。岩手県海岸部の南端にあたる陸前高田と境を接する土地だ。舞根地区は奥行きの深い湾に面した一角で、気仙沼の市街地からは山をひとつ、曲がりくねった山道によって越えて行かなくてはならない。舗装はされているが街灯のひとつもない道で、雪が降る冬の夜などは相当あぶないのではないかと思う。５月、縁あって、この海岸を訪ねた。言葉を失うほどすばらしい海だった。

おじゃましたのは「森は海の恋人」というスローガンに立つ植林運動で知られる畠山重篤さんのお宅。湾のもっとも奥まったところに牡蠣の養殖場があり、その筏を見下ろす高台、最高のロケーションに家がある。沿岸部の地図を見てもらうとわかるが、指のように奥まった湾の端に位置している。このあたりは元来「水山」という地名で、山肌からいくつもの小さな流れが湧き出ては海に注いでいるのだという。海の水は澄んでいる、と同時に、いかにもゆたかな、懐の深い緑色を帯びている。海はいきなり深くなる。岸辺から石を投げれば届きそうなところが養殖の現場、牡蠣の成長の場所だ。冬は牡蠣、夏は帆立が、ここから出荷される。

いま仮に「冬」と呼んだものの、「牡蠣はＲのつく月に」という言い伝えにこだわる必要はなく、５月でも新鮮きわまりない生牡蠣が食べられる。畠山さん自らが達人の技をもってナイフ一本ではらりと開けてくれる牡蠣の肉は、はちきれそうなほど肉厚で、掌の幅ほどの大きさ。何もつけず頬張れば、それは海の本質としかいいようのない、単純かつ無限に複雑な旨味で口の中をいっぱいにしてくれる。

ここを訪ねることは長年の夢だった。ぼくは畠山さんの著書の長年の愛読者で、名著『リアスの海辺から』は「文化人類学」の授業

で教科書に指定したこともある。森が海を育てる。水系が森の滋養を運ぶ。エコロジーという言葉は端的にいって「すべてがすべてにつながっている」ことへの覚醒、その意識をさすが、生態系の思想を牡蠣漁師の現場から説得力ある、地に足が着き腕を波で洗う言葉で語ってくれたこの本にふれたときのよろこび、そしてそれが最後にスペイン・ガリシア地方のリアス式海岸への旅で締めくくられることへの感動は、いまも鮮明に覚えている。その旅の起点だった畠山さんの拠点の海に、いまこうしてやってきたのだ。

自宅のすぐ下にある作業場から、船を出してもらった。快晴の午後、みるみる岸から遠ざかる船にはクレーンが設置されている。これで牡蠣が成長するワイアを引き上げるのだ。あの山が室根山、と後方を指さしながら畠山さんがいう。台形にも見える遠い山頂が、この地方の漁民たちの「山測り」つまり位置計測の目印であり、気仙沼湾をうるおす大川の源流でもあった。標高895メートル。畠山さんたちが「牡蠣の森」と呼んだ、植林運動の最初の対象地域でもあった。

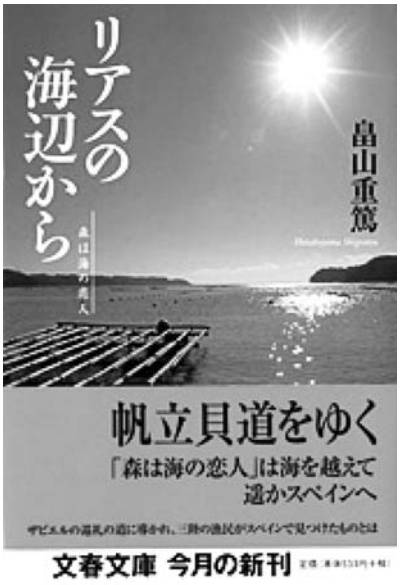
「森は漁民の命」とかつて畠山さんは『森は海の恋人』に書いていた。「森の恵みが無ければ１日も生きてゆけない」と。そもそも海に出るための木造船すら、杉、檜、欅、松の４種類の樹木から作られる。「木造船は、海に浮かぶ森」であることの所以だ。大島を右手に見ながら湾の外まで出ると、さすがに風も強く冷たく波も高くなる。濃い緑の山々を見ると、見渡すかぎりの風景がまさにまるごとひとつの生態系であり、個々の生命の単位をはるかに超越した大きな脈動を共有していることが感じられる気がする。

そして森と海をむすぶ物質循環の、連鎖の鍵を握るのが鉄だということも、畠山さんに教わった。「2011年４月」に「あとがき」が書かれた感動的な著書『鉄は魔法使い』を読んでみてほしい。中学生のころ、牡蠣の赤ちゃんが食べる植物性プランクトンの培養の決め手が雑木林の腐葉土であることを知って以来の疑問が、北海道沿岸の「磯焼け」（つまりは海の砂漠化）の報道をきっかけに氷解する。北海道沿岸に欠けているのは鉄であり、しかも植物プランクトンや海藻にとって吸収しやすい、「フルボ酸鉄」だった。磯焼けの原因は森林破壊であり、逆に気仙沼の海のゆたかさを支えるのは、海上から見わたすかぎりの山と森なのだった。

畠山さんの探求の目は、さらに海洋の「深層大循環」やジェット気流がもたらす黄砂に含まれる鉄といった、惑星規模の物質循環にむけられる。もっとも身近にあった牡蠣から出発して、水系を遡って海から山に森にいたり、三陸から地球各地へと旅は拡大し、認識はそれにつれて深まり、深まるとともにどんどん新たな疑問も湧く。フィールド科学としての生態学のこの実践者の姿から、われわれが学ぶべきことはきわめて多い。

やがて湾内に戻り、牡蠣筏の引き上げを見せてもらった。７、８メートルはあるワイアに500個ものみごとな牡蠣がついている。それ以外に海鞘やムール貝も海藻も、まるで海の花束のようにいろいろなものがついている。それはほとんどむせるようなゆたかさで、何かおこぼれはないかと窺いつつカモメたちが乱舞するのもおもしろい。

当たり前のことだけれど、場所があり、土地がある。われわれを生かす物質循環があり、ヒト社会が生存のすべてを負いながらも破壊をくりかえす環境世界がある。何につけ、現場のある人のお話をうかがうのは楽しい。かれらとの対話に貢献できるような何かを、着想を、ヴィジョンを、文学作品をはじめとする表現世界から見出してゆこうと思う。



■第19回ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会開催のお知らせ
と　き：2013年8月31日(土)～9月3日(火)
ところ：白百合女子大学

（〒182-8525東京都調布市緑が丘1丁目25）
大会実行委員：岩政伸二（白百合女子大学）

※発表プログラム・懇親会などの詳細は同封資料をご覧ください。
また変更などは学会ウェブサイト・メーリングリストにてお知らせします。

ここでは昨年度も好評を博した院生組織のプレ企画をご紹介いたします。
初日の午前中を予定しておりますので、ぜひご参加ください。

■2013年度全国大会院生組織企画

今つくりたい環境文学作品のアンソロジー（2013）

山田　悠介（立教大学・院）
戸谷　洋志（大阪大学・院）

【企画概要】

1995年にScott Slovic氏が編集された *Worldly Words: An anthology of American nature writing.*（ふみくら書房）のようなアンソロジーを、2013年の今作るとするならば、どのような作品を所収したいと思いますか？

院生組織では、昨年度に引き続き、今年度の全国大会でもプレ企画を企画しています。今年のテーマは、「今つくりたい環境文学作品のアンソロジー(2013)」。環境文学作品のアンソロジーは、前述のアンソロジーの他、『ユリイカ』のネイチャーライティング特集（1996年）や、ふみくら書房発行の『フォリオa』での「アメリカン・ネイチャー・ライティング特集」(1993年)、「ジャパニーズ・ネイチャーライティング特集」（1999年）の一部として発表されたり、あるいは、『場所の感覚――アメリカン・ネイチャーライティング作品集――』（野田研一・山里勝己・編注、研究社、1997年）、*Literature and the environment : A reader on nature and culture.*（Lorraine Anderson, Scott Slovic, John P. O'Grady編、Longman、1999年）などのかたちで出版されてきました。ここではほんの一部を挙げたに過ぎませんが、こうした数多のすぐれた作品集が環境文学研究を大きく前進させる一翼を担ってきたことはご承知の通りです。ASLE-Japan ／文学・環境学会が創設20周年を迎えようとする今、1990年代に相次いで刊行されたアンソロジーを後継する、あるいはそれらとはまた一味違った作品集を皆さんとご一緒に想像（のなかで創造）できないかと思い、本企画を提案させていただきました。版権や紙幅などの制約はひとまず横に置いておいて、忌憚のないご意見をやりとりできればうれしく思います。

参加者の皆さんには、環境文学作品のアンソロジーを2013年の今編むとするならば、(1) どのようなテーマ、活用法をもったアンソロジーを作りたいか、(2) アンソロジーにはどのような作品を所収したいか、の二点をご発表いただきたいと思います。企画の前半部分では（1）について議論し、後半ではお一人あたり５分間で各自が推薦する作品の概要、魅力などについてプレゼンしていただき、最終的に「作品リスト（目次）」を作成できればと思います。

本企画にご興味をもたれた方、プレ企画に参加をご希望の方は、院生組織代表の山田悠介（yamayama030303@gmail.com）までご連絡いただければと存じます（当日の飛び入り参加ももちろん大歓迎ですが、できるだけ参加人数を把握したいと思いますので、事前に参加ご希望の旨をご連絡いただければ幸いです）。なお、プレ企画の開催時間や詳細につきましてはメーリングリストで改めて告知をさせていただきたいと思いますので、そちらもご参照ください。

皆さまのご参加を、院生組織一同心よりお待ちしております。

■台湾シンポジアム報告

東アジアのエコクリティシズムとは
―East Asian Symposium on Literature and Environment参加報告

結　城　正　美（金沢大学）

Palgrave Macmillanから出ている“Literatures, Cultures, and the Environment”シリーズに、この春、東アジアのエコクリティックによる論文集が加わった。Simon EstokとKim Won-Chung（いずれもASLE-Korea）編集による *East Asian Ecocriticisms: A Critical Reader*（2013）がそれである。ASLE-Korea, ASLE-Japan, ASLE-Taiwanそして中国からそれぞれ三名ずつ執筆している、と書けば、いかにも東アジアのエコクリティックによる共同プロジェクトという感じがするが、実際は編者独自の方針にもとづくものであり、執筆者の一人として最終的に編集方針に違和感を抱くに至った。〈東アジアのエコクリティシズム〉を冠する論文集の刊行が喜ばしいということに異論はないが、何をもって「東アジア的」とするのか、という点は議論されるべきであったと思う。東アジアに生活や研究の拠点をおく者が執筆すれば「東アジア的」となるわけではない。そんなことは明々白々である。

東アジアのエコクリティシズムとはどういうものなのか。台湾での東アジア文学・環境シンポジウムでの研究交流をとおして、そのような問題意識がさらに深まった。

シンポジウムは、2012年12月７日（金）、国立台湾大学で開かれた。参加者は、日本から４名（岩政伸治、豊里真弓、藤江啓子、結城正美）、韓国から５名（Simon Estok, Kim Won-Chung, Lee Dong-hwan, Shin Doo-ho, Wu Chan-Je）、そして台湾の研究者や学生が30名程度だったと思う。東アジアのASLE 会員が集うシンポジウムは、2007年８月（金沢）、2010年11月（ソウル）に続き、３回目だ。金沢とソウルでは「ASLE日韓合同シンポジウム」という名称であったが、それは当時まだASLE-Taiwanが存在していなかったという理由による。金沢でもソウルでも台湾からの個人参加を歓迎しており、初回から〈東アジアの〉エコクリティシズムを意識していたという点は明記しておきたい（なお、ソウルのシンポジウムでは中国からの参加もあった）。

さて、シンポジウムではASLE-T, K, Jの代表者による基調講演に続き、８件の個人報告があった。各国の作品や思想を検討題材とする報告や、英語圏と東アジアのエコクリティシズムを比較研究的に論ずるものなど、多彩な内容であり、質疑応答も活発だった。なかでも、東アジアに着目するあまりに東／西という軸が強調され、より現実に深刻なアジアにおける南北問題に目が向けられていない、というフロアからの指摘は、〈東アジアのエコクリティシズム〉を考える上できわめて重要だと思われる。

シンポジウムの最後はラウンドテーブルセッションで、今後の東アジアのエコクリティックのネットワークのあり方について意見交換をおこなった。とくに司会のLin Yaofu氏からいくつもの大胆な提案があった。たとえば、ASLE-T, K, Jは互いに年次大会の案内を共有し、自由に参加できるようにする、とか、東アジアのエコクリティシズムに関する電子ジャーナルを作る、とか。どれも素晴らしいアイデアであったが、時間切れで具体的な方策にまでは議論が及ばず、結局アイデアで終わってしまったのは残念であった。

もっと時間があれば実現できていたと思われることがもうひとつある。それは、読書会形式のセッションだ。金沢とソウルでのシンポジウムでは、開催国の環境文学作品を選定し、その英訳を参加者が読んでシンポジウムに臨むというかたちをとっていた。そして、シンポジウム当日は大学院生の会員をコメンテーターとして読書会が進められた。互いの国や地域の作品を知ることは、東アジアのエコクリティシズムを考える上で不可欠である。今後は読書会をぜひ復活させたい。

その「今後」であるが、東アジアのエコクリティシズムシンポジウムは隔年開催かつ日韓台で持ち回り、という申し合わせがあり、次回は2014年に日本で開催することになっている。そう、もう来年の話なのだ。どういうシンポジウムにするのがよいだろうか。また、名称はどうすべきか（初回・前回とは異なり、台湾でのシンポジウムには“ASLE”の文字はない）。〈東アジアのエコクリティシズム〉に向けて、議論を重ねていきたい。

■ASLE-J-Grad［院生組織より］

ダイオウグソクムシ「No.1」の絶食

戸　谷　洋　志（大阪大学文学研究科後期博士課程）

生命は、新陳代謝の働きによって、自己に対立する他者を食い尽くし、そうすることで自己と他者の区別を止揚する。ドイツの哲学者ヘーゲルは、そこに生命の本質を洞察した。そんなヘーゲルの思想に否を突きつける者が、三重県鳥羽水族館にいる。彼の名はダイオウグソクムシ「No.1」である。

ダイオウグソクムシは等脚類の海生甲殻類である。見た目がダンゴムシに似ていることから、水族館によっては「ダンゴムシの遠い親戚」と紹介されることもある。しかし、その大きさは、ダンゴムシを遥かに凌駕する。体長は平均で20－40㎝、最大で50㎝ほどにもなる。その巨体たるや、街行く子猫と肩を並べるほどである。加えて、3500個の複眼を持っており、その威圧感は筆舌に尽くしがたい。主食は海洋生物の死骸である。光の届かない海底で息を潜め、死骸を発見すると食事に取り掛かる。「海の掃除屋」という異名にふさわしく、海底に滞留する生物の死骸を跡形もなく一掃する。その生態には未だに多くの謎が残されているという。

「No.1」は、2007年９月に鳥羽水族館に入館した体長29センチのオスだ。同館では毎月１回餌を与えている。ところが、彼は09年１月に約50グラムのアジ１匹を摂食した後、唐突に何も食べなくなった。筆者が本稿を執筆している時点では、未だに絶食を継続している。既に1500日の絶食を超えている。原因は不明であるという。

この不可解な事件が、新聞やテレビなどのメディアで盛んに取り上げられ、世間の注目を集めている。どこかグロテスクで、どこかメカニカルで、半透明の神秘的な風貌を持つ「No.1」は、瞬く間にその名を知られていった。その影響もあって、同館ではダイオウグソクムシグッズの売れ行きが好調であり、ジュゴンやラッコなどの人気者たちを脇に追いやる下剋上ぶりである。2013年の端午の節句では、同館はダイオウグソクムシの鯉幟まで作ってしまったという。

筆者は新聞で彼のことを知り、何とも釈然としない不可解な気分に襲われたのを覚えている。何の兆候もなく、何の理由もなく、ある日唐突に、動物が絶食を始める。飼育員が餌を置いても、一切反応を示さない。そんなことが本当にあるだろうか。その事実は、長く犬を飼っている筆者には、いかにも奇怪であった。動物というものは、食べ物があれば見境なく手をつけるものだろう。思慮分別を失って、我を忘れながら貪り食うのが、動物の一番動物らしい姿だろう。筆者にはそうした偏見があった。そして、「No.1」はその偏見を鮮やかに裏切ったのだ。

同時に、筆者はあるエピソードを思い出した。イタリア現代思想の哲学者、ジョルジュ・アガンベンが紹介した、タネガタマダニにまつわる逸話である。

アガンベンは『開かれ』（2002）の中で、動物学者のヤコプ・フォン・ユクスキュルの環境世界に対する洞察を要約している。人は、人間も動物も、みんな同じ時間と空間の地平に属していると考えがちである。しかし、実際にはそうではない。そうした考え方は、この世界は単一のものである、という前提に基づいている。しかし、動物たちが生きている世界は、実際には人間の生きている世界とは全く違っている。動物の生きる世界は、その動物の知覚器官と密接な連関を持っているのであり、どのような器官を持っているかによって、現れる世界も変わってくるのである。それが環世界Umweltという概念である。

その具体例が、タネガタマダニによって示される。このダニは、樹の小枝にぶら下がって、温血動物を待ち伏せする。下を動物が通ると、ダニは動物の上に落下して、吸血する。この一連の出来事から、このダニが生きている世界には、少なくとも枝が見えているのであり、動物の姿が見えているのであり、甘美な血の味覚が存在するだろうと、人は思う。ところがそうではない。まずこのダニには眼がない。耳もない。味覚も備わっていない。ダニが感知できるのは、動物の汗が発する酪酸の匂いだけである。ダニはその匂いに反応して、運任せに枝の下へ落下する。着地した場所が摂氏37度の温度であり、吸血することができる柔らかさがあれば、見境なくその場所に口を突き刺す。だから、このダニにはそもそも温血動物がどういうものか理解できていない。というよりも、このダニが生きている世界には、酪酸の匂いと、摂氏37度の温度と、口を突き刺せる柔らかさしか存在していないのだ。ただそれだけの要素で構成されているのが、タネガタマダニの環世界である。

この哲学的な議論の最後を、アガンベンは一風変わったエピソードを紹介することで閉じている。それは、あるダニが、ドイツのロストックという都市にある実験室で、18年間、餌を与えずに生きたまま飼われていた、という記録である。アガンベンはそのエピソードに、こう付け加えている。

> 18年ものあいだつづいたこの宙吊り状態に置かれたダニとその世界に、いったい何が起きていたのか。環境との関係の内部にどっぷりつかっていた生物が、その環境が絶対的に欠如した状態で、いかにして生き延びるなどということが可能だったのか。そして、時間もなく世界もなく「待つ」ということは、いったいどういう意味なのか。（ジョルジュ・アガンベン，恩田温司・多賀健太郎訳，『開かれ 人間と動物』，平凡社，2011，84頁）

新聞を広げる筆者の頭に、同じ疑問が、絶食するダイオウグソクムシ「No.1」に対して浮かんできた。彼が生きている世界には、何が浮かび上がっているのだろう。もちろん、ロストックのダニと「No.1」とでは状況が違う。「No.1」の目の前には餌があるのだ。なのに、「No.1」はそれに手を付けようとしない。筆者は想像する。彼が生きている世界の中で、その餌はどんな風に現れているのだろう。それは、彼の環世界の中で、唯一彼が認識できるものなのではないか。輪郭のない無遠慮な暗闇の中で、目の前に置かれた餌は、まるで光を纏ったかのように、煌々と浮びあがっているのではないか。そしてその餌を食べることこそ、自分が生きているという手応えを感じさせる、ほとんど唯一の行為なのではないか。それなのに彼は餌を食べることを拒否している。頑なに。何故だろう。

あるいは、彼は「深海の掃除屋」として産まれてきたことを、哀しんでいるのかも知れない。自分で選んだわけではないのに、気が付いたときには、光の射さない暗黒で死骸を貪り続けることを宿命づけられていることを、嘆いているのかも知れない。彼を取り巻く人間たちの好奇心に満ちた眼差しを受けながら、寡黙を貫く彼の半透明の背中からは、そんなものを感じる。

■シリーズエッセイ シネマ×環境（2）

――フーベルト・ザウパー『ダーウィンの悪夢』――

塚　田　幸　光（関西学院大学）

昔々、と言っても半世紀前、ナイルパーチがヴィクトリア湖に放たれる。諸説あるが、真相は定かではない。どうやら、湖の漁獲高を増やすためということらしい。ブラックバスと琵琶湖の関係を見ても明らかだが、外来魚は生態系を破壊し、環境に優しくない。ましてやナイルパーチ。全長２メートル、重さ100キロにも及ぶスズキ目アカメ科の巨大淡水魚である。小魚などはひとたまりもない。湖はナイルパーチ天国となるわけだ。アフリカ最大、そして「ダーウィンの箱庭」と称されるヴィクトリア湖。生物多様性の宝庫であり、人類発祥のトポスに近接するこの湖は、今や「ナイルパーチ」・ビジネスによって変貌を遂げる。かつて地元漁民がティラピアや小魚を捕り、ささいな日々の糧を享受したアフリカのオアシスは、もはやそこには存在しない。グローバリゼーションの悪夢が出現しているからだ。

ナイルパーチは、悪夢／ナイトメアを（再）生産する。それは、人間の欲望の複数形なのか。フーベルト・ザウパー『ダーウィンの悪夢』（*Darwin's Nightmare,* 2004）は、ナイルパーチから生じた欲望の軌跡、或いはその悪循環を暴く。まず、ナイルパーチ・ドリームから、ナイトメアへのプロセスを辿ろう。

それはまるでドミノ倒し。ナイルパーチを放つ。外敵がいないので増える、増えまくる。もちろん、固有種は激減し、生態系は崩れ、環境は悪化。でも、ナイルパーチの身は美味。凄く美味い。となると、魚を求め、人が集まる。ナイルパーチ漁は活況を呈し、加工工場が乱立し、地元経済は潤い、雇用が生まれる。産業不毛の土地は、こうして一躍アフリカの注目の的となる。美味いフィレ。それは輸出食品となり、外貨を獲得できる貴重な資源となる。映画でも言及されているが、ヨーロッパや日本の食卓で、ナイルパーチはお馴染みの魚なのだ。スーパーで見る安い白身魚。ふと表示を見ると、そこにはナイルパーチの文字。原産国はタンザニア。そう、実は僕らも食べている。

では、ナイルパーチ・ビジネスは、いいことずくめなのだろうか。否、それは悪夢の入り口に過ぎない。当然のことながら、ビジネスは労使の対立や、富／資本の不均衡を生む。加工工場を持ち（或いは投資し）、輸出のチャンネルを持つ資本家に富が集中する一方で、漁民や工場労働者は、持たざる者の運命を引き受けざるを得ない。漁民の増加は魚の単価を引き下げ、乱獲を促し、自らの首を絞めることになるだろう。穫っても、穫っても、儲からないというわけだ。また、船を持たない労働者は、工員として安い賃金でこき使われる。富／資本の独占は、格差を生み、格差を再生産することで、搾取のシステムは強化されるのだ（労働者が労働者である限り、彼らは永遠に資本家になることはない。生かさず、殺さずは、資本主義の必然だろう）。だが、悪夢はここで終わらない。湖の周辺に集まった人々は、複数の欲望に絡め取られる。マネーは「性」の双子なのか。ナイルパーチの勝ち組、工場主や投資家、パイロットに対し、売春が横行する。当然、それは珍しい光景ではないだろう。だが、事態はそう単純ではない。小銭を稼ぐ漁民や工場労働者ですら、売春婦のターゲットなのだ。そもそも小銭ですら、最貧国では貴重であり、欲望するに余りある。結果、皮肉にもと言うべきか、エイズの蔓延を助長することになる。貧困、セックス、エイズ。負の連鎖は、人々の命を奪い、さらなる貧困を生み出す。そして、親を亡くした子供たちは、ストリートチルドレンへと転落し、粗悪なドラッグの常習者となり、街の通りを彷徨う。図１（合唱パフォーマンス）や図２（立ちすくむ少年）のように、映画の冒頭、そして全編を通じて、カメラはチルドレンのいる風景を捉える。彼らは生きるため、通りに出て、何かをするのだ。これはフィクションではない、現実なのだ。

図１

図２

本エッセイで、映画のすべてを紹介することはできないが、悪夢を象徴するモチーフには触れなければならない。それは、ヴィクトリア湖上空を行き来する「飛行機」である。飛行機の影が水面を滑る（図３）。映画の開始が飛行機の出現と同時であり、刹那、飛行機は画面を横断する蜂へと転移する。管制塔のシーン。ブーン、バチン。蜂をつぶす音と飛行機の爆音が交差し、両者はこの場所に存在する「異物」として、メタ

フォリカルに結びつく。

図３

図４

飛行機の反復。荷（ナイルパーチ）を積み過ぎて、墜落した飛行機の残骸（図４）。漁をする人々の上空を飛び交う飛行機（図５）。スケッチとして描かれる飛行機には、魚が張り付く（図６）。湖面に映る飛行機の影は、差異を伴い反復し、映画のトーンとイメージを定める。そして、飛び立つ飛行機を見送るタンザニア女性のラストショットに至るまで、このモチーフは嫌悪と魅惑を誘発するのだ。

図５

図６

では、飛行機は純然たる資本主義の権化なのか。或いは、西欧の搾取の象徴なのか。答えはさらなる迷宮へと観客を導くだろう。加工されたナイルパーチを運び、人々の富を収奪する飛行機。それは、アフリカの内戦を加速する武器をもたらす。ロシア人パイロットが言う「どうしたらコンゴで戦争ができるんだい？誰が爆弾やカラシニコフを持ち込むと思う？いいか、エール・フランスでもなければ神様でもない。武器を運んでいるのは他でもない俺たちだよ」。ナイルパーチは武器となり、武器はナイルパーチとなるのだ。この狂気に関するザウパー自身の見解は、こうだ「言うまでもなく飛行機は多くの象徴を運ぶ機械です。＜グローバル化の象徴＞、＜暴力の象徴＞、人間としてではなく別の意味での＜優位性の象徴＞を運び込んでいます」(『グローバル化と奈落の夢』せりか出版、2006年)。グローバルのシステムがアフリカを収奪し、暴力の種子を蒔く。なけなしの資源／ナイルパーチと交換され、武器は人々の人生を奪う。ザウパーはこの悪循環を活写し、＜グローバリゼーション＞にカタチを与えるのだ――グローバル資本主義の理論は、ウォール・ストリートよりも資本が現実に生み出される場所のほうがはっきり見え、分かりやすいからです」。ウォール・ストリートではなくヴィクトリア湖畔を見る。確かに、貧者の全てを奪う貧困ビジネスの方が、資本主義の真実に近いかもしれない。ナイルパーチが外敵のいない湖で増殖したように、小魚／アフリカを喰らう資本主義は、グローバル化の＜リアル＞だろう。

最後に、『ダーウィンの悪夢』上映を巡る論争に関して、グローバルなスキャンダルを紹介しよう。奇しくも『クローバル化の奈落の夢』で、西谷修が事の経緯を詳しくまとめているので、ここでは最低限度の情報にとどめたい。『レ・タン・モデルヌ』2005年12月号。ここに『ダーウィンの悪夢』の酷評が掲載される。映画はアフリカの真実をねつ造し、不安を煽っている、と。パーチ産業は富の収奪ではなく、経済貢献であり、産業の活性化であるという論調である。以後、ザウパーは、複数の批判を受け、窮地に立たされることになる。だが、あるジャーナリストが彼をそこから救い出すのだ。アフリカを取材してきたベテラン・ジャーナリスト、ジュリアン・コマーは、『レ・タン・モデルヌ』の記事を書いたフランソワ・ギャルソンという人物に着目する。ギャルソンとは何者なのか。彼は広告企業ハヴァスやそのグループのカナール・プリュスで働いた経歴を持つ。ハヴァスの株主はポロレ・グループ（タンザニアで事業を展開)。そしてこのグループは、ナイルパーチ最大の輸入業者カルフールやマクドナルドと蜜月である。つまり、ギャルソンを経由して、ナイルパーチ・ビジネスの裏の顔が見えてくるのだ。植民地時代から続くフランスのアフリカ利権。「フランサフリック」と呼ばれるコネクションは、いまだ健在というわけだ（加えるなら、EUの補助を受けている現地企業やEUの主要輸入業者アヴォナ・フードが、映画のネガティヴ・キャンペーンを展開していた事実も分かっている。同じ穴のムジナが、強烈なノーをこの映画に突きつけたのだ)。グローバリゼーションの悪夢を暴くことは、西欧資本主義のダークサイドに直結する。だからこそ、この映画は招かれざる客となる。

ナイルパーチとマクドナルド。この関係から予想するに、フィレオフィッシュは確実にナイルパーチ。だとすると、どうしてもある光景がフラッシュバックする。『ダーウィンの悪夢』が反復するモチーフは二つある。それは、(パンパンに肥って見える)飛行機と(身を削がれた）ナイルパーチの死骸（図７）である。

図７

白身を削り取られた巨大魚の残滓。それは、地元の人々の貴重な食料であり、同時にアフリカ収奪を象徴する。これを知ると、フィレオフィッシュの味が変わるだろう。何だか、食べられない。だが、僕らが白身魚／ナイルパーチを食べるとき、その「向こう側」を想像することは、決して無駄でないはずだ。(了)

事務局より

■2013年度ASLE-Japan ／文学・環境学会 第1回役員会のご報告

2013年５月25日（土、10:00〜13:00）に、東北大学川内キャンパス（仙台市青葉区川内41）A304教室にて、2013年度第１回役員会が開かれました。まず、報告事項として、ニューズレターNo.32発行とNo.33編集の進捗状況、会誌『文学と環境』第16号編集の進捗状況、新規入会・退会者、広報活動（書誌情報更新）、院生組織の活動（ウェブサイト掲載の用語集の更新等）、ASLE-Japan20周年記念出版事業、ASLE-Taiwan主催東アジアASLE合同シンポジウム（2012年12月;台湾）についての報告がありました。続いて、審議事項として、2012年度決算報告および2013年度予算案、今年度全国大会のプログラム、2013年度一部役員改選、終身会員制度導入、2014年東アジアASLE合同シンポジウム開催、ASLE（US）からの学会参加費助成対象者選定要請への対応、役員会開催時期の見直しについて各担当役員より説明があり、審議を経て各案が了承されました。また、会費の値上げの可能性についても審議されましたが、今年度は見送ることとなりました。なお、昨年度全国大会基調講演講師の渡辺利雄氏より寄付があったことが報告されました。渡辺先生には、改めて感謝申し上げます。

■2014年東アジアASLE合同シンポジウム 開催のお知らせ

と　き：2014年11月22日（土）〜23日（日）
ところ：名桜大学（沖縄県名護市為又1220－1）
※シンポジウムは、2014年度全国大会と同時開催となる予定です。シンポジウム・全国大会での研究発表応募要領などについては、学会ウェブサイト・メーリングリストにてお知らせします。

■ウェブサイトおよびメーリングリストのご案内

学会ウェブサイトでは、ASLE-Japanの活動内容を会の内外に広くお知らせすることをめざし、すでに過年度のニューズレターを広く公開するなどの取り組みがはじまっています。なかでも、会員のみなさまに是非ご活用いただきたいのが、有志が管理しているフェイスブック（facebook）の情報です。学会ウェブサイトホームで「News」をクリックし、ページの下のほうをご覧いただくと、環境文学関係の様々な最新情報（イベントやCFP、新刊情報なども）がご覧いただけます。

また、会員メーリングリストは、メーリングリスト登録済みのメールアドレスより、会員各自で自由に投稿していただくことが可能です。会員同士の情報共有などにご活用ください。なお、ニューズレター発行時期（６月・12月）以外で、特に会員宛ての急ぎのお知らせがある場合は、メーリングリストにてご連絡いたします。登録・メールアドレス変更などについては、事務局までお知らせください。

＜会費納入のお願い＞

例年通り、６月末発行のNewsletter 発送に合わせて振込用紙を同封しております。年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

口座番号　01300-0-93821
加入者名　文学環境学会
（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

広報から

2013年５月はじめに、ASLE-J書誌情報リスト更新版のアップロードをいたしました。アドレスは以下のとおりです。ご協力くださいました先生方、ありがとうございました。
http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/

今後も定期的に情報の更新をしてまいりますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂（misa@kaiyodai.ac.jp）までお送り下さい。次回の更新は2013年11月ごろを予定いたしております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせていただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せいただいている先生方は、新しい情報のみをご連絡ください。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J　広報委員　喜納育江、大野美砂、河野千絵

編集後記

なんなのだろう。最近とてつもなく老けてきた気がする。教室で笑っている、まだ十代の学生達。話題が合わないのは、ずいぶん前からそうであり、「ジェネレーション・ギャップ」のせいだと思ってきた。でも、もはやそんな言葉に収まらないほど、彼らとの間には壁がある。「老い」という階段を降るだけの自分。これから「生」の階段を駆け上がる彼ら。焦燥にも似た感情を抱きながら、今日も目の前に積み上がった仕事をひたすら片付ける。ほんとうは他に何か、もっとするべきことがあるような気がするのだが。「彼ら」に伝えねばならない「言葉」が、どこかに、何かしらあったはずなのだが。願わくばこのNLが、そうした旧世代から新世代への橋梁となりえますように。

（編集委員一同）

【発　行】
代表　管啓次郎
事務局：札幌大学　豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡３条７丁目３番１号
Tel／Fax: 011-852-9617（直通）
E-mail:toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編　集】
編集代表：辻　和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江３－４－１
近畿大学文芸学部
E-mail: twain1910@gmail.com